

寺島実郎著「われら戦後世代の坂の上の雲」を読む

- 一人一つのNPOを考える -

団塊の世代が「笠の雪」となって後代世代にのしかかるか、社会を支える側にまわるのかによって高齢化社会の様相が変わるといっても過言ではない。

それを「新しい公共」と呼ぶべきだろうが、国家や権力による強制ではなく、主体的参画によって公的分野を支えることが鍵となろう。官対民という構図だけで議論することが多いが、じつはいかなる社会においても、官と民のあいだの「公共」という分野を誰かが支えないと、人間社会は成り立たない。団塊の世代が、地域社会の文化・教育・福祉から地球環境まで、もう一度眼を向けなおして、自らの関心と適性を判断して、何らかのかたちで公共という分野で汗を流す方向に向かうならば、高齢化社会は暗い展望に引き込まれる必要はない。カセギ(経済的安定)とツトメ(貢献)は大人が大人である要件であり、そのことを担う団塊の世代の最後の転機における覚悟が問われている。

私は個々人が「一人一つのNPO」という志をもって、自分の能力、性格、関心領域に見合ったかたちでのNPO(特定非営利団体)活動への参画が鍵だと思っている。それが、地域の文化、教育活動でも、福祉や介護でも、環境保全、国際交流でも、自分自身の問題意識で選択し、自分の納得のいくかたちで参画することを工夫すべきである。専門的技量のある人、時間と金のある人、さまざまな関与があってよいのだと思う。

寺島実郎著

「われら戦後世代の坂の上の雲 - ある団塊人の思考の軌跡 - 」PHP新書、PHP研究所

2006年4月28日刊

- 2006年9月1日記 -